

藤枝市史十五年

湯之上 隆

あたらしい藤枝市史の編さんは、二〇世紀の終わりに近い平成十年（一九九八）に始まり、二十一世紀を迎えたのち、十五年を要して終了した大きな文化事業でした。

この間、平成二十一年に岡部町と合併したのち、藤枝市は今や、静岡県内二三市のなかで六番目の人口を擁する都市に発展しています。藤枝出身の作家である藤枝静男が、幼い頃に抱いていたという、志太郡第一の文化の中心地としての誇りは、これからも引き継がれ、いつその成熟への方策が実現されなければなりません。

また、平成二十三年の東日本大震災は、日常と非常のいのちの営みを考えさせる大規模自然災害であり、長く記憶にとどめて、語り継ぐ必要があります。

当初、十三年間の予定で始まった編さん事業は、財政事情により二年延長されて十五間に及びました。具体的な成果として、通史編二冊、資料編五冊、別編民俗一冊を始め、大正時代の未刊行の旧村誌などを公開した市史叢書二六冊、市史研究一三号、市史だより二八号の刊行物の他、編さん中の調査研究成果を市民に解説する市民学習会二四回、通史編の成果の要所を紹介する市史講座二五回とシンポジウム二回を開催しました。昭和三十九年（一九六四）の市制施行十周年記念事業として刊行された、上・下二冊の市史を継承しつつも一新する内容になったものと思います。

過去を正しく理解することによって、これからの険しい道のりを確かな足取りで進むことができます。私

たちの力を尽した市史が、そのための抛るべき礎になるとともに、編さん事業によって収集され、郷土博物館に保管される約二九万点もの資料が、藤枝市民の大切な財産として、広く活用されることを願っています。編さん事業にあたって、惜しみないご支援とご協力を寄せられたすべての方々のお力がなければ、円滑な進行はなかったと思います。終りにあたって、深い謝意を申し上げます。

（市史編さん専門委員長・静岡大学人文社会科学部教授）



『藤枝市史』通史編上 刊行記念シンポジウムの様子
（平成22年7月19日開催、一番左が筆者）

◆ 刊行物のご案内 藤枝市史編さんの集大成
待望の『**図説 藤枝市史**』を刊行

市史編さんの委員三一名が執筆し、豊富なカラー図版を用いて、九〇項目・二七コラムを通して、原始から現代までの藤枝市の歴史トピックスを分かりやすく紹介しています。



- 体裁 A4版、フルカラー、208ページ
- 販売価格 一冊八〇〇円
- 販売場所 藤枝市郷土博物館・文学館

◆ 事務局 編集後記 ◆

十五年にわたった平成の藤枝市史編さん事業が無事終了しました。この間、事業に携わった委員・事務局職員の総人数は、一〇〇名以上にのぼります。市民ボランティアの協力をはじめ、本当に大勢の人たちの手によって市史編さん事業が支えられ、成し遂げられたことが実感できます。

得難い人の出会いと交流、貴重な資料の発見と調査の実績が蓄積され、それらが事業に関わった人たちの成長の糧となり、豊かな研究成果を生み出す土台になりました。事業終了にあたり、物故者を含め、市史編さんに関わったすべての皆様に心より御礼申し上げます。

藤枝市史だより

第28号
【最終号】

平成25年3月31日発行
編集 藤枝市文化財課
発行 藤枝市郷土博物館
〒426-0014
藤枝市若王子500
〒426-0014
藤枝市郷土博物館
054-645-1100
E-mail
muse@city.fujieda.shizuoka.jp

はなぐらじょうあと 花倉城跡の測量調査

藤枝市の指定史跡になっている花倉城跡は、藤枝市街北方の烏帽子形山(標高三九二・七メートル)の東に連なる山塊頂上(標高二九七メートル)付近を中心に縄張りをもつ山城跡です。現在、山頂の二の曲輪付近からは南側の眺望が開けていて、花倉や下之郷の集落を見下ろし、藤枝や焼津の街の先に駿河湾を望むことができます。この花倉城はまた、天文五年(一五三六)の花蔵の乱にかかわる文書に記される「葉梨城」であると考えられる城跡としてよく知られています。こうしたことなどから、花倉城跡は今川範国が葉梨荘を与えられて以来の今川氏の動静に合わせて築城されたものと考えられてきました。しかし、これまでに花倉城跡で正確な地形測量や発掘調査が行われたことはなく、いつどのような経緯で築城されたのかや、後にこの地域を支配する武田氏や徳川氏による改修が行われたかどうかなどは不明のままです。

細部を読み取ることができ、一定程度正確な測量図が完成しました。

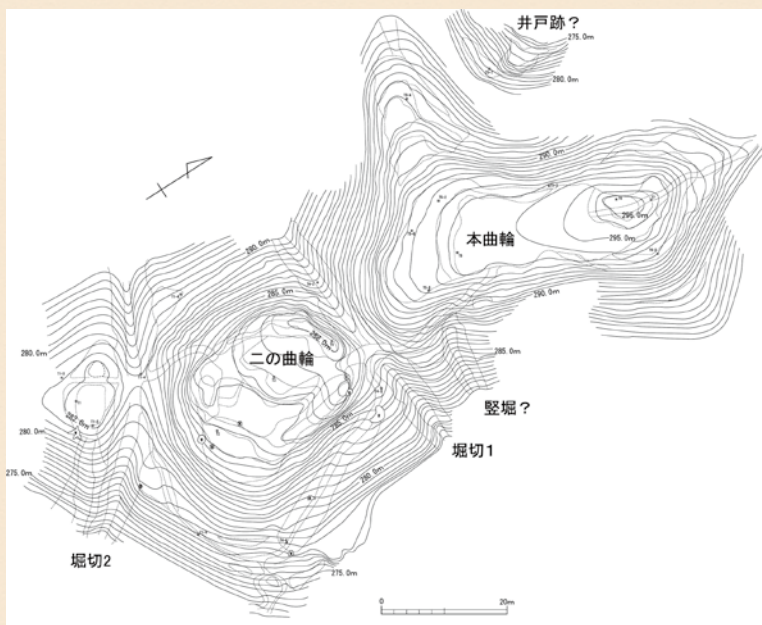
北側の最高所の本曲輪から一段下がって堀切1を挟んで続く二の曲輪、その南西側の堀切2といった配置はこれまで考えられていた通りですが、それぞれの正確な位置や規模などが分かります。本曲輪の南側のやや鋸形に曲がって突出する部分は二の曲輪の南北主軸方向に連なっており、もとの地形を残しているものといえるでしょう。この本曲輪南側の東斜面には、堀切1と並行するように縦堀状の溝が確認できました。

藤枝市史の編さんにあたって、花倉城跡の調査も検討されましたが、多くの課題を抱える中でなかなか実現しませんでした。しかし、通史編の刊行を終えた平成二十三年冬、残された課題を検討する中で花倉城跡の調査が再検討され、考古担当で本曲輪と二の曲輪を中心とした測量調査を実施することになったのです。調査は平成二十四年三月と翌年二月(三月の二回に分けて実施し、平板と光波測距儀と

このほかにも、二の曲輪の土塁の形状や曲輪に付帯する新たないくつかの平場を確認したり、本曲輪西側の谷筋には井戸跡ではないかと考えられる窪みを確認するなど、細部の発見や課題も生ま



花倉城跡遠景



花倉城跡 測量図

れています。この図によって、あらためて正確な縄張りを復元したり、さらなる発掘調査のための指針を定めることも可能でしょう。

市史編さんのなかで中世については、鬼岩寺の中世墓や徧照光寺を含めた石塔群の調査を行いました。その成果からも中世の長期間にわたって藤枝で有力者層が活躍したことが分かりました。また、葉梨の寺家前遺跡で行われた発掘調査では、今川氏がこの地に入る以前とみられる屋敷地が発見されており、開発領主の存在が推定されています。今川氏ゆかりとされる花倉の郷や花倉城跡には、まだ知られていない長期にわたる中世の歴史が埋もれているものと推定されます。

(考古担当専門委員 篠原和夫/静岡大学人文社会学部准教授)

蓮華寺池をめぐる市部・五十海・若王子三か村の争い

江戸時代初期、市部村と五十海村は、水不足に苦しんでいました。そこで、両村は若王子村と協議し、代替地一町を渡すかわりに若王子村の地内に溜池をつくらせてもらい、そこから水を引くことにします。慶長十五年（一六一〇）に三か村は、駿府町奉行・彦坂九兵衛へ願い出て許可をもらい、同十八年（一六一三）に若王子村内に溜池を完成させます。これが蓮華寺池（江戸時代には蓮花寺池とも書きました）です。蓮華寺池の水は、蓮華寺池用水により市部・五十海両村へもたらされ、両村の田地を潤しました。

市部・五十海両村にとって蓮華寺池の水は、両村が農業を営むうえで必要不可欠でした。しかし、池を抱える若王子村は、瀬戸川などから十分な農業用水を確保でき、蓮華寺池の水が多少減つても影響がなかったため、いつしか蓮華寺池を耕地として開発したいと考えるようになります。この立場の違いから、蓮華寺池とその用水の管理・利用をめぐる、市部・五十海両村と若王子村との間で何度となく争論が繰り返されることとなります。

最初に争論が起きたのは宝永七年（一七一〇）のことです。この年、若王子村が領主の田中藩へ蓮華寺池の開発を願ひ出します。当然、市部・五十海両村はこれに強く反対しました。結局、市部・五十海側の主張が認められたようで、開発は許可されませんでした。

享保九年（一七二四）にも蓮華寺池の水の管理をめ

ぐり争いが起きています。この年五月、日照りだったため、三か村立ち会いで水門を開け、市部・五十海両村へ水を引いたところ、翌日に若王子村が勝手に水門を閉じてしまいます。両村は若王子村へ抗議しましたが、若王子村は蓮華寺池は自村のものであり、水が少ないため渡せないと返事し、両村の言い分をはねのけたため、やむを得ず両村は田中藩へ訴えています。この訴えに対して田中藩は、三か村へ水を等分に分配するよう申し付けています。

その後、元文二年（一七三七）に蓮華寺池の干拓をめぐる争いが起きています。このときは、若王子村側が干拓を進めたこと、池の管理から締め出されたことを不服に思った市部・五十海両村が田中藩に訴え出ています。吟味の結果、市部・五十海側の主張がおおむね認められ、三か村で共同管理するよう命じられています。

若王子村と市部・五十海村との争いは、明治時代になっても続きます。明治二年（一八六九）、若王子村は田中藩に代わって新しい領主となった静岡藩に対し、新たに発見された湧き水を使用すれば水不足にならないと市部・五十海両村に内緒で申し入れ、蓮華寺池の干拓許可を得ます。しかし、これも最終的には市部・五十海両村が粘り強く静岡藩へ干拓中止の交渉をしたこと、また、若王子村が蓮華寺池の代わりにすると主張した湧き水が日照り時には両村へたどりつく前に地面にしみこんでしまい使い物にな

らないことがわかったことなどから、干拓は中止になります。なお、この事件の後、両村と若王子村は和解し、以後大きな争いはなくなりします。そして、蓮華寺池は干拓されずに、築造から四〇〇年経った今もその姿を残し、藤枝市民の憩いの場となっています。
 （近世担当調査委員 長屋隆幸／愛知県立大学非常勤講師）



若王子村絵図に描かれた江戸時代の蓮華寺池（藤枝小学校所蔵）

街道の歴史を伝える岡部宿の本陣跡

藤枝市内には、江戸時代の東海道の宿場町が二つあります。品川から数えて二十一番目の岡部宿と、二十二番目の藤枝宿です。宿場町では一般的に、荷物の取次や、旅人のための宿泊施設や茶屋などさまざまな建物が軒を連ねて町並みを形成します。なかでも本陣は、参勤交代の大名や公家・幕府の役人が宿泊や休憩をするところで、宿場町の中で最も格式の高い施設です。

岡部宿では二軒の本陣があったことが古文書や絵図などから知られていますが、このうち内野氏が経営した本陣はその敷地がほぼ当時のまま残り、藤枝市指定史跡「岡部宿本陣址」（昭和四十八年四月一日指定）として指定されています。

内野本陣の建物については、十四代将軍徳川家茂の上洛にあたって行列の通行の準備として宿泊の部屋割りをした、慶応元年（一八六五）の間取図が残されています。この資料によると本陣建物は、間口十五間・裏門までの奥行二十九間で、百七十四坪・惣畳数百二十九畳半とされています。最も格式の高い御上段の間（床間付）八畳、次の間八畳のほか十三部屋、このほか玄関や台所、湯殿、雪隠などがあったことがわかります。

平成二十二年四～六月には、史跡整備事業に先立って本陣の建物遺構の保存状況を確認するための試掘調査を実施しました。敷地内には井戸が残っており、江戸時代から残存することが確実な遺構であることが

ら、間取図と現地を比較するうえで重要な手掛かりとなりました。また、宿場町ではたびたび火災があったことが記録にみえますが、発掘調査では高熱を受けたことを示す赤褐色の土と、炭化物が混入する土層が確認されました。この層が遺構の年代を考える上での判断の基準となりました。調査実施時に存在した住宅は、建物基礎の礎石がこの焼土を含む整地層の上面にあることから明治時代以降に建築されたことがわかりました。

調査では、井戸から約一・二メートル南のところで街道に直交する方向に並ぶ石列が、約七メートルにわたって

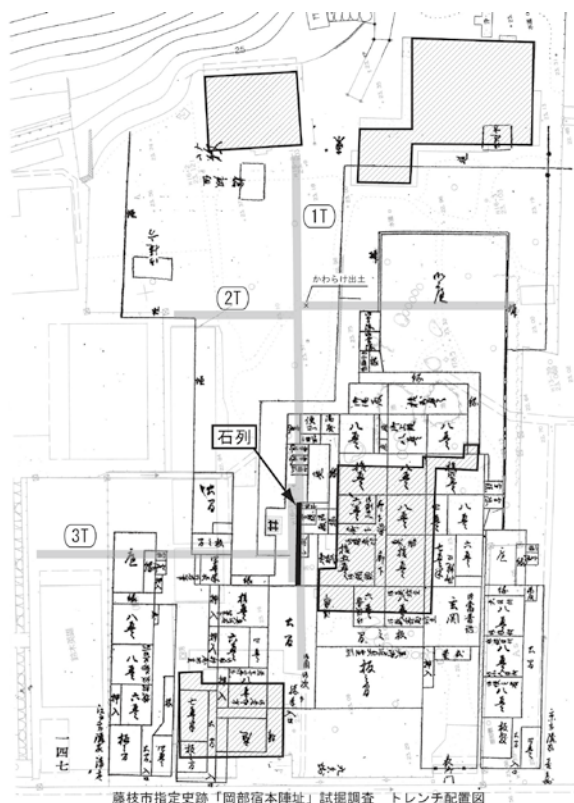
て発見されました。石材は、幅二〇～五〇センチメートルの山石と幅約二〇～四〇センチメートルのやや小ぶりな河原石が、横口面を揃えて使われていました。間取図と比較すると、ほぼ一致する場所が認められたことから、この石列は江戸時代後期～末期の本陣建物の基壇の一部に相当する構造物とみられます。

調査の結果、近現代以降に、江戸時代の本陣建物がその機能を終えた後にも、引き続き住宅が建築されたり、庭園が造成されたことなどにより江戸時代の遺構が失われた場所もありますが、本陣建物の遺構の一部は地下に保存されていることがわかりました。本陣跡の史跡では、本陣建物の規模が体感できるような遺構表示を行うなどの整備が計画され、藤枝の貴重な歴史資源を活かして、市民をはじめひろく来訪者を集める場となることが期待されています。

（考古担当調査委員 岩木智絵／藤枝市市民文化財課）



本陣建物の基壇とみられる石列の検出状況



本陣間取図と試掘調査トレンチ配置図